

東広島交響楽団

第21回演奏会

Higashihiroshima Symphony Orchestra



大木正夫

日本狂詩曲 指揮：松尾亮平

Masao Ohki

ブロッホ

ヘブライ狂詩曲『シェロモ』 チェロ：海野幹雄
指揮：松尾亮平

Bloch

ラフマニノフ

交響曲第3番 イ短調 指揮：井手口彰典

Rachmaninov

2018.8.12(日) 14:00開演 (13:30開場、16:00終演予定)

広島大学サタケメモリアルホール 入場無料(全席自由)

※チケット等はありません。お気軽にご来場ください。未就学児童の同伴はご遠慮ください。お車でご来場の際は大学構内の駐車場がご利用になれます。



主催

東広島交響楽団実行委員会
stefano_scarampella@yahoo.co.jp

東広島交響楽団

検索

音のたどり着く先

井手口彰典 (立教大学・音楽社会学)

「魂の故郷」という言葉がある。たとえこの身は「いま・ここ」に縛り付けられていても、目を閉じ心の翼を広げればたどり着ける、懐かしく暖かい場所。ある人にとってそれは兎を追い小鮒を釣った田舎の風景なのだろう。また別の人にとっては都会のコンクリートジャングルこそがそうなのかもしれない。あるいはより高次の、氏族や民族のレベルで受け継がれてきた「魂の故郷」もあるはずだ。

そんな「魂の故郷」への想いは、クラシック音楽のテーマとしてもしばしば扱われてきた。G.ヴェルディの歌劇《ナブッコ》で歌われる「行けわが想いよ」などは特によく知られたものだ。だがそうした著名な例の他にも、作曲者の深く熱い想いが半ば無意識的に滲み出たような傑作はある。たとえばS.ラフマニノフの交響曲第3番は、ロシア革命によって祖国を追われ二度とその大地を踏むことのできなかった作曲家が人生の晩年に書き上げた望郷の歌である。他方、ユダヤ人であるE.ブロッホにとっては民族が継承してきた歴史こそが「魂の故郷」だったのだろう（シェロモとは古代イスラエルの王ソロモンに他ならない）。そして大木正夫の日本狂詩曲は…説明の必要もあるまい。

ロシア、古代イスラエル、日本。その対象こそ違えど、故郷への想いは変わらないはずだ。お盆の帰省とも重なるこの時期、ラフマニノフたちの音楽に耳を傾けながら、あなた自身の「魂の故郷」を想起してみるのはどうだろう。



海野幹雄 (チェロ)

Mikio Unno

音楽一家に生まれ（父は元NHK交響楽団コンサートマスター海野義雄、母は元東京都交響楽団首席チェロ奏者海野ユキ恵）、14歳より母にチェロの手ほどきをうける。桐朋女子高等学校音楽科（共学）を経て、桐朋学園大学アンサンブルディプロマコース修了。その後、洗足学園大学ソリストコースにおいて更に研鑽を積む。これまでに第20回霧島国際音楽祭特別奨励賞、第14回川崎市音楽賞コンクール最優秀賞、第7回おぎでんシュガーホール新人演奏会オーディション入選、第12回全日本ソリストコンテストグランプリ等、数々の賞を受賞。全国の主要なプロオーケストラに首席チェロ奏者として客演しているほか、一般財団法人地域創造「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティストとしても活躍の場を広げ、指揮・編曲・出版の分野でも活動、現代音楽の演奏にも定評がある。これまでにチェロを倉田澄子、堤剛、木越洋、山崎伸子、ルートヴィヒ・クヴァントの各氏に師事。

東広島交響楽団

Higashihiroshima Symphony Orchestra



抱えながらも、その身軽さと自由さを活かした音楽活動を展開しています。また幅広い参加者と音楽を通して交流したいという理念のもとに活動しており、これまでに小学生から社会人まで、また東広島市民のみにとどまらず他市や他県からも多くの参加者とともに音楽をつくってきました。

2013年8月に佐村河内守の作といわれていた交響曲第1番『HIROSHIMA』の全曲版を広島初演し、2016年8月には新垣隆の新作交響曲『連禱-Litany-』を世界初演。このほか、2015年5月に同じく東広島市を拠点に活動する東広島混声合唱団との合同演奏会を成功させるなど、年々その活動の幅を広げています。

結成10周年を記念し作成した楽団ロゴは、広島出身のアーティスト・エドツワキ氏によるデザイン。



©Ed TSUWAKI 2016